陳舜臣さんを語る会通信

NO.14　Jul.　2020

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日 2020年7月20日

業界誌から見た　家業「泰安公司」、戦前社屋の位置

先ず、陳舜臣さんの父・陳通氏が創業した「泰安公司」の初期の社屋・家屋の位置を業界誌で確認します。いわゆる「三色の家」ですが、この家は、空襲で焼けてしまいます。その後、戦後、北長狭通三丁目四八へ移転します。これについては次頁で、登記簿の記録から見ていきます。　（編集委員　橘雄三）

《「三色の家」の時代 》

陳舜臣さんの父・陳通氏が経営する貿易会社の社名は次の記述から、「泰安公司」とわかります。

父の経営する「泰安公司」は、ほかの華僑商社とおなじように、危険分散のため他社を株主として参加させている。（『道半ば』p. 39）

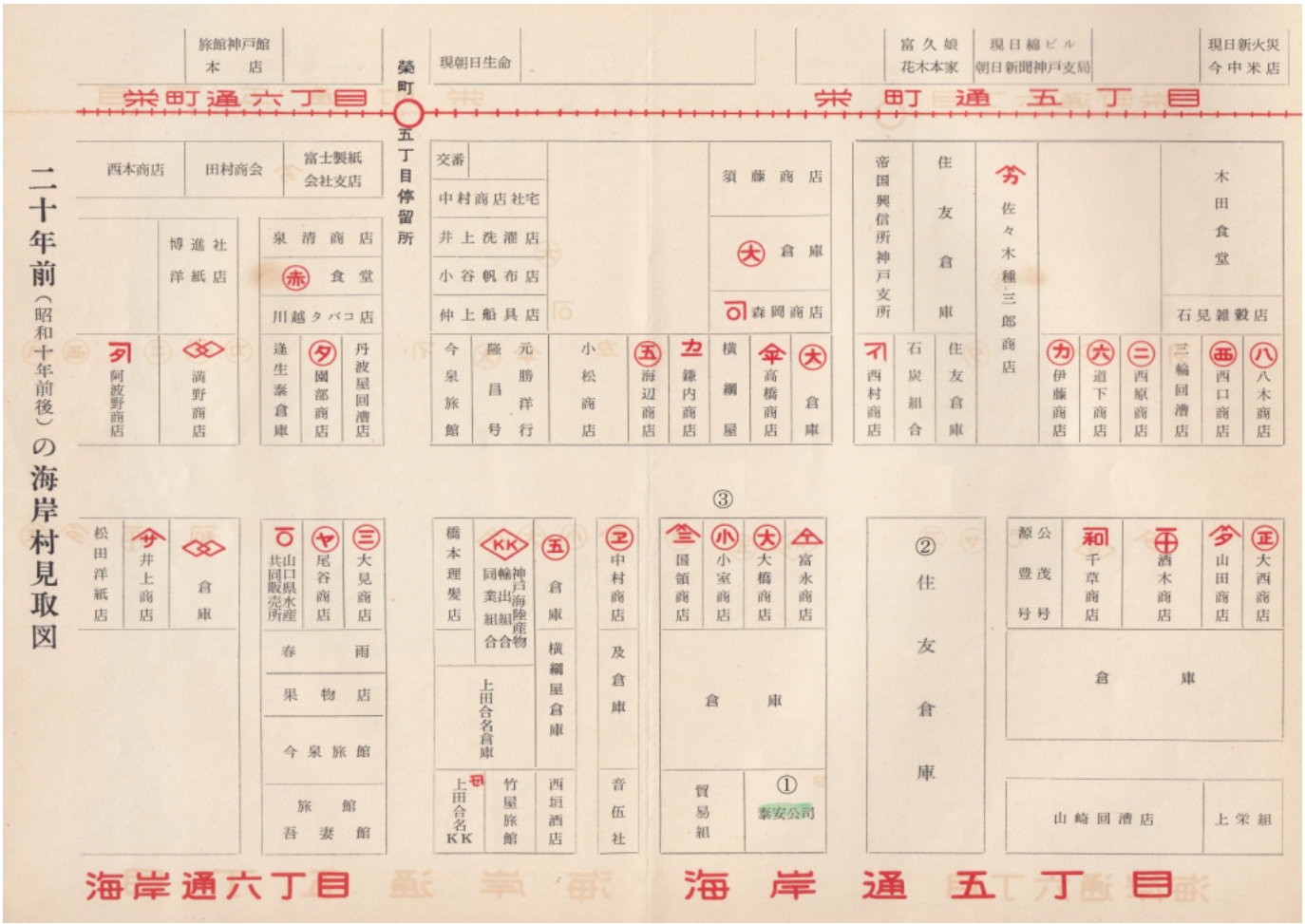
この会社が昭和８年の創業であることは、本「通信」第13号２頁で記述しました。そしてその位置は、『神戸海栄会会報 第三号』（昭和31年発行）に差し込まれている「二十年前(昭和十年前後)の海岸村見取図」から読み取ることができます。

海岸通五丁目の我が家は、本通りに面していた。（中略）我が家は五丁目のちょうど中ほどにあり、住友倉庫の西隣というのが、最もわかりやすい。借家を転々としていた我が家も、私が小学校四年のときにここに移り、空襲で焼かれるまでの十年あまりのあいだ、ほぼ落ち着いたといえる。（中略）

小室君の家は海岸通で、我が家とは背中合わせになっていたわけだ。（『道半ば』p. 24-25）

小室君は、陳舜臣さんの小学校の同級生で、家も近かったので、『道半ば』によく出てきます。

「泰安公司」があったところは、国道２号の拡幅により道路敷になってしまい、今はありません。



上の「見取図」下段中央、①は「泰安公司」 ②住友倉庫　③小室商店（番号①②③は編集委員加筆）
『道半ば』の記述と合致します。

陳舜臣さんが家業に取り組み始めたときの社屋はどこにあった？

陳舜臣さんは終戦の翌年２月、帰国し、台湾で、三年半ほど中学の英語の教師をします。1949年10月、日本に戻り、翌年、結婚。家業に本格的に取り組むようになります。家業に取り組んだ期間は、作家として踏み出すまでのほぼ10年です。ところで、海岸通りの社屋が空襲で焼けた後、泰安公司の社屋はどうなったのか、『道半ば』ほか陳舜臣さんの作品からは判然としません。私の知識不足でしょうか。

この点を補う情報が得られればと思い、法務局へ足を運び、「泰安公司」の登記簿を閲覧しました。今はコンピュータ化されていて簡単です。しかし、その情報量は現代のビジネスに必要な事項に限定されており、私のような調査目的に答えてはくれません。「古い記録は、既に閉鎖されている手書き登記簿を見ないとわかりません」との職員の答え。この後は、職員の好意に期待することになります。小一時間待って、「泰安公司について、これが一番古い記録です」と言って渡されたのが下にあげた「閉鎖登記簿の謄本」です。　（編集委員　橘雄三）

《1．現「泰安公司」社長、陳武洋氏の話》

「祖父・陳通は海岸通りの社屋が空襲で焼けた後、北長狭通３丁目に平屋を建て、そこに会社をうつしました。舜臣伯父と父・仰臣、ほか数人の社員が仕事をしていたのはこの時代です。

やがて、舜臣伯父は作家へと道を変え、父・仰臣が家業を継ぎます。家業を継いだ父は、この地にビルを建設しました。いまの４階建て泰安ビルです。一昨年、竣工50年を祝いました」

ただ、陳武洋氏の話からは、陳舜臣・仰臣兄弟がこの地で家業を引き継いだはっきりした時期はわかりませんでした。

《２．登記簿の内容》

「閉鎖登記簿の謄本」の［１商号］、［２営業の種類］、［３営業所］の各欄は、全て、承知している内容です。しかし、昭和参拾年拾月六日に、陳水樹から、「商号を営業と共に譲り受けた」ということは、舜臣さんの父・陳通氏がそれまで使用していた商号「泰安公司」は何だったというのでしょうか？

状況を補強、裏付ける情報として申請した「閉鎖登記簿の謄本」が、新たな疑問を引き起こしました。

「三色の家」が空襲で焼け、「泰安公司」の戦後がどこで、どのような形でスタートしたのか。台湾から戻り、1950年、結婚した陳舜臣さんが家業に取り組み始めた、そのときの社屋はどこにあった、どんな社屋だったのか。それを知りたいと思い調べてきた調査ですが･･･。

結論です。先述、「泰安公司」の現社長・陳武洋氏の話の状況は、陳舜臣さんが家業に取り組むようになった最初からそうだったのではと思います。戦後の混乱期です。登記年月日が実態より遅れることは、普通にあったと思われます。

ただ、「泰安公司」という商号譲り受けの問題は最後まで残ります。

登記事項

１商号
泰安公司
２営業の種類
貿易業
右に附帯する一切の業務
３営業所
神戸市生田区北長狭通参丁目四八番地
４商号使用者の氏名及び住所
神戸市生田区中山手通四丁目参九番地
陳水樹
右昭和弐九年拾弐月六日登記

登記事項

昭和参拾年拾月六日　陳通は商号を営業と共に譲り受けたので　同日商号使用者の氏名及び住所を左の通り変更した
商号使用者の氏名及び住所
神戸市葺合区布引町弐丁目参の壱九
陳　通
右昭和参拾年拾月七日登記

陳舜臣さんは再度山に1029回登った！

《1. 華僑がつくった「神戸武夷登山会」》

福建出身の華僑は多い。二世、三世も、親たちから武夷の名勝をきかされている。六甲山系の山を背にした神戸でも、戦前、華僑が登山会をつくったとき、それに「武夷登山会」という名をつけた。私の父もその会長をしたことがあるが、武夷は福建出身の人にとっては、あこがれの山だったのである。

（『茶の本 茶事遍路』より）

台湾台北を原籍とする陳舜臣一家が、どうして武夷登山会のメンバーになっているのかということになりますが、陳舜臣一家のルーツは大陸、「中原」で、福建省を経て台湾に渡ったことは、本「通信」第10号でも言及しました。『道半ば』にも、次のような記述があります。

小学三年の春休みの帰省は祖父の法事のためだった。（中略）長い「のりと」のようなものが読みあげられる。（中略）道士はいれかわりたちかわり、美声を競うかのように声をはりあげ、子供心にもうんざりしてしまった。

最後にのりと(?)を捧げられる人、つまり祖父の住所氏名が読みあげられる。これはわかった。住所は台湾ではなく、そこへ移住する前のものである。

― 泉州府同安県･･･

この泉州府が出てくれば、もうすこしで終わるとわかってほっとしたものだった。(p. 48)

「福建省泉州府」という台湾移住前の居住地は陳家の人々の脳裏にすり込まれているのです。

現在の会則では、「本会会員の資格は年齢、国籍及び性別は問わず」となっています。

《2．「神戸武夷登山会」の創立及び会則ほか》

以下、この節は、『神戸武夷登山会満60周年記念会報』（1999年発行 神戸華僑歴史博物館蔵）に拠っています。同会は、民国二十四（1935）年四月創立で、陳舜臣さんの父・陳通氏も創立者の一人です。

会則の条文をいくつかあげます。

第二条　本会の署名所は再度山『稲荷茶屋』『灯籠茶屋』に置く。

第六条　会員の義務

１．会員は毎日一回登山し所定の備付けの署名簿に署名をする。但し代筆は無効。

上掲『満60周年記念会報』に陳舜臣さんについて興味深い記述を見つけました。

会　員　登　山　記　録

（1936年４月１日～1999年３月31日）

会員番号	氏　名	継続年数	６０年度登山回数（98.4.1－99.3.31）	本年度末累計回数（入会－99.3.31迄）
1253	長嶋 加寿子	7	31	1,038
341	陳　舜臣	49	0	1,029
1109	藤原 秀雄	15	3	1,023

神戸華僑歴史博物館蔵

「武夷登山會壱周年紀念大會」の記念写真です。民国25年というと、一九三六年ですから、陳さんは12歳です。集合写真の前列に坐っているかも。「登山会」創立者の一人、父・陳通氏はどこ？

『方壺園』収録の一篇、「九雷渓」を一読、瞿秋白(くしゅうはく)をおもう

「九雷渓」は、推理小説集『方壺園』（1962年 中央公論社）収録の一篇です。発行は『枯草の根』の翌年で、陳舜臣さんの最初期の作品と言えます。下の画像は、現地「陳列室」の展示です。　（編集委員　橘雄三）

《1.「九雷渓」の時代背景、登場人物、あらすじ》

まず、時代背景です。作品から引用します。

一九三四年の春である。南京の国民政府は、江西・福建の紅軍にたいして、第五次の総攻撃をかけた。蒋介石はこれを『総決算の掃蕩戦』と呼び、百万の大軍を投入した。塘沽（タンクウ）協定によって日本と妥協し、北方の憂を除いているのである。

蒋介石は、「日本軍は軽い皮膚病、共産党は重い内臓疾患」とし、国共内戦を優先しました。

主な登場人物は次のとおりです。

高見清治	主人公、F新聞上海特派員。史鉄峯に親近感を持ち、その文章を次々と翻訳
史鉄峯	抒情詩人、革命家。反政府組織の巨頭。国民党軍に捕まるが、肺患で寝たきり。刑死か病死かという状況にある
羅淑芳	看護婦。ストリーに大きくかかわる
黄少校	史鉄峯が捕らわれている余家で監視・駐在
張上尉	史鉄峯が捕らわれている余家で監視・駐在

次はあらすじです。

反政府組織の巨頭、史鉄峯は国民政府軍に捕らえられ、身柄は、武夷山山岳地帯、仙営の郷紳・余家の邸の一室にある。史は肺を患って寝たきりだが、銃殺処刑されるとき、しっかり立てなければ無様だと、体力を残すことに執着している。

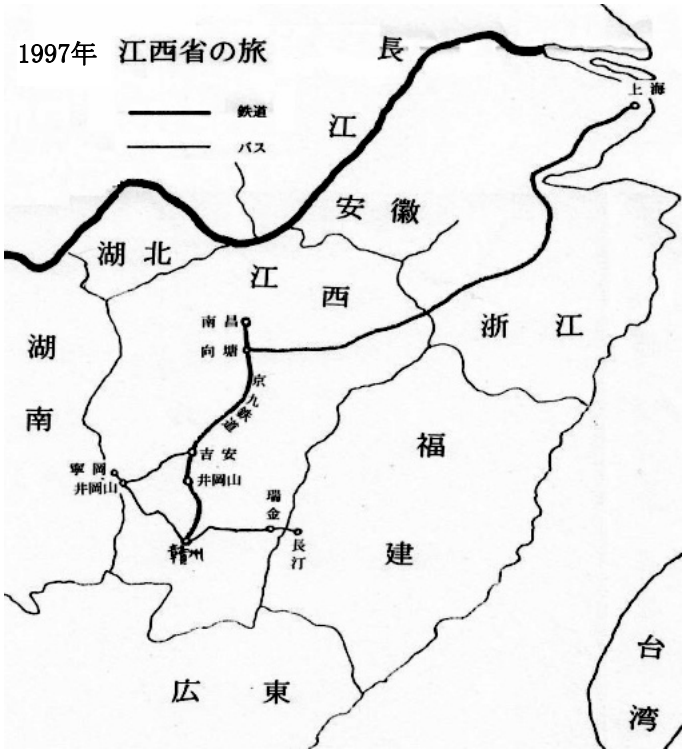
高見清治が、車で、福建省西北、九雷渓沿いの難路を仙営に向かうところから話は始まります。余家で史鉄峯の看護をする羅淑芳は、旗袍を着た魅力的な女性で、深くストーリーにかかわってきます。

本作品は推理小説で、一人の殺人と、一人の自死及び幇助がストーリーの中心になります。

《２.「九雷渓」を一読、瞿秋白をおもう》

史鉄峯の名は、中国ネットで検索しても出てきません。まず、架空の人物とみてまちがいないでしょう。そして、私は、一読、瞿秋白をおもいました。瞿秋白の処刑と「九雷渓」は、時代背景とロケーションがぴったりです。

瞿秋白は、1935年、江西革命根拠地で国民党軍に捕らえられ、福建省長汀で処刑されました。上の地図、江西省から武夷山を越え、福建省に入ったところです。人物設定もそんなに違いません。史鉄峯は、抒情詩人、反政府組織の巨頭で、宿痾(しゅくあ)の肺患で寝たきりという設定ですが、瞿秋白も、中国共産党の初期最高指導者の一人で、散文家、評論家としても有名です。また、肺結核を病み、療養しながらの活動だったのも同じです。



陳舜臣さんが、瞿秋白をヒントにしたとか、モデルにしたとか言っているのではありません。私は、瞿秋白処刑の地、福建省長汀を訪れた日本人として、このことにふれるのも意味のないことではないと考え、ここに紹介しました。

瞿秋白処刑地には、大きく立派な記念塔とその横に、「瞿秋白同志就義地」の石碑があり、小さな「瞿秋白烈士陳列室」が建てられています。上の写真は、刑場に赴く瞿秋白です。

「陳列室」に次のような対聯が掛かっていました。

人生得一知己足矣　人生は一知己を得れば足れり
斯世當以同懐視之　この世はまさに同懐を以てこれを視るべし

これは、魯迅が洛文（ローウエン）の署名で書いたもので、瞿秋白への心情を『何瓦琴の語』を借りて吐露したということです。このことは、高田淳著『魯迅詩話』（中公新書）に、詳しくでております。

私のHP『中国の友人たち』「井岡山・瑞金への旅」もご覧下さい。 http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/